

つくば市洞下集落における屋敷林の変容と民家の敷地内空間構成の関係

小森 美咲*・村上 暁信**

*筑波大学 理工学群, **筑波大学システム情報系

はじめに

屋敷林は、地域の景観構成要素として重要な役割を担っており、今後保全を進めていく上で、これまでの維持喪失の過程の解明が必要とされる。屋敷林の変容を扱った研究として、量的データに着目したもの（近江ら、1997）、質的データに着目したもの（不破ら、2007）が挙げられる。しかし、屋敷林の変容過程の解明にあたっては、緑被率の量的データに加え、屋敷林の周辺環境などの質的データを併せて分析する必要があると言える。そこで本研究では、つくば市洞下集落を対象に、緑被率の変容と周辺環境として民家の敷地内空間構成に着目し、どのような民家で屋敷林が維持喪失されてきたのかを明らかにすることを目的とする。

1. 解析データおよび解析方法

まず複数の時期に撮影された空中写真を用いて、民家の敷地ごとの緑被率を算出した。次に、現段階での各民家の特徴を把握し、特徴から民家の分類を行った。本研究では、民家の特徴として敷地内の外部空間の構成に着目した。外部空間の構成要素に、緑被の種類 5 項目(屋敷背後林・列状配列・前庭/座敷庭・面状モチノキ・生垣/竹垣)と敷地境界の種類 2 項目(ブロック塀・トタン塀)を設定し、クラスタ分析を行った。最後に上記 2 種類のデータから、民家のクラスごとに各年代の緑被率を算出し、緑被率の変遷について考察を行った。

2. 結果および考察

クラスタ分析の結果、民家は A～D の 4 クラスに分類された。クラス A は伝統的な外部空間構成を持たないクラスであり、緑被率の維持度合いは 4 クラスの中で最も低い傾向を示した。クラス B は屋敷背後林や樹木の列状配列の伝統的な空間構成をもつクラスであり、緑被率の維持度合いはやや低い傾向が見られた。クラス C は敷地境界にトタン塀、生垣竹垣を併用し、屋敷背後林もしくは

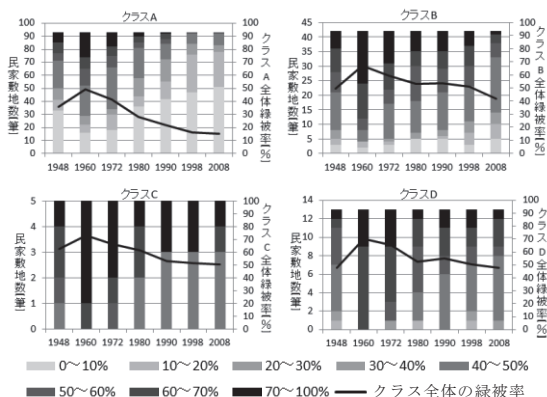


図1 クラスごとの緑被率の変遷

列状配列をもつクラスである。屋敷林の維持度合いは 1960 年から 1990 年にかけてはやや低いが、近年では緑被率の推移が横ばいで緑被は維持される傾向にあった。クラス D は 4 クラスの中で最も伝統的な外部空間の構成要素をもち、ほぼ全ての民家において屋敷背後林、列状配列、前庭・座敷庭の形成が見られた。緑被率は 4 クラスの中で最も維持度合いが高かった。

おわりに

分析の結果、伝統的な外部空間の構成要素を多くもつ民家ほど緑被の維持度合いが強い傾向が見られた。今後屋敷林の保全を進めていくにあたっては、量的な観点のみならず、屋敷背後林や前庭・座敷庭、列状配列といった樹木構成の種類や敷地境界など周辺環境の質的観点にも着目する必要があると言える。

引用文献

近江慶光・丸田頼一(1997) 神奈川県逗子市新宿地区における緑被の推移に関する研究. ランドスケープ研究, 60(5), 675-678.
不破正仁・藤川昌樹(2007) 明治期銅版画に描かれた筑波地域の農家における伝統的屋敷林の樹木構成パターン. ランドスケープ研究, 70(5), 559-562.